

## 高橋健治先生を送る

山本正幸 (生物化学専攻)

私が高橋健治先生に初めてお会いしたのは、理学部生物化学科に進学した昭和43年の春でした。当時先生は生物化学教室の助手で、我々の学生実習を担当してくださいましたが、物静かな中でも研究に打ち込まれている雰囲気印象に残っています。我々が進学した年は、学生のいう東大闘争、教官のいう東大紛争の年であり、悪童どもはやがて学生実習もおっぼりだして侃侃諤諤に突入していきました。また当時の生物化学教室には助手と大学院生で組織する二部会というものがああり、教室の様々な問題を取り上げては教授会（一部会）と拮抗するというような時代でもありました。高橋先生はその研究実績から二部会の重要メンバーでありましたが、この時期を終始良心的に、また研究の荒廃を防ぐことを心掛けて乗り切られたように覚えています。

高橋先生のご略歴とご研究の内容の一端を以下に記します。先生は昭和32年に理学部化学科をご卒業になり、引き続き大学院（化学専攻）に進学されました。この間、赤堀四郎先生のもとでチトクロムcの構造と機能の研究をされました。翌年より、新しく開設された生物化学専攻所属となり、江上不二夫先生のもとでリボヌクレアーゼT1の構造と機能の研究を開始し、それを大きく発展させられました。先生は、リボヌクレアーゼT1の精製法を確立して全構造を決定するという大きな業績を残されましたが、その間、半年ほど理学部3号館に泊まり込み、冬は発泡スチロールの板を敷き詰めた上で、精製用のカラムと添い寝をしていたという話です。このお仕事で日本生化学会奨励賞を受賞され、また国際的にも高い評価を受けています。当時リボヌクレアーゼT1の精製試料としては先生のものが唯一であり、世界中の

生化学者に提供されました。その中には著明な研究者も多く、ノーベル賞受賞業績となったホーリーのアラニン・tRNAの全構造の決定は、先生の精製したりボヌクレアーゼT1に負うところ大なるものであることを、ホーリー自身が認めています。また、先生は蛋白質における化学的研究方法を発展させられましたが、特に、フェニルグリオキサールによるアルギニン残基の化学修飾法は、これまでに400を越える論文に引用されており、この面においても生化学の発展に大きな貢献をなされています。

このように述べると、高橋先生は研究の虫、実験の鬼のように思われることと思います。実際、ご退官の3年ほど前まではご自身で実験をされ、教授室へ伺うとまず実験機具が眼に入ったものです。日頃大学で接する先生は、研究を純粋に愛する、いわゆる学究肌という言葉がぴったりです。先生を知る多くの方はそのような印象をお持ちだと思います。かく言う私も高橋先生のお姿としてそうした印象を強く持ち続けていました。ところが、研究室の助手や院生の方に話を伺うと、高橋先生は一步研究室を出ると大変身するらしいのです。まず、先生はたいへんなスポーツマンであり、毎日腕立て伏せを最低50回は欠かさないと、御殿下に学生が水泳やエアロビクスに行くとき先生にべったりお会いするという話を聞きます。また、スキューバー・ダイビングが好きなため、研究室の旅行は海辺になることが多く、先生一人で遊泳禁止の時間や場所に潜りに行ってしまい、研究室の人達がハラハラさせられるそうです。先生は学生に対し、「研究はまず体力である」とよく言われますが、こうした日常に裏打ちされた言葉であったわけです。

研究・スポーツだけでなく、先生は芸事にもたいへん達者とのことです。研究室員や卒業生の結婚のお祝いの席などでは見事な詩吟を披露されるし、研究室のコンパでは率先してカラオケを歌われ、ダンスもされます。ご趣味を挙げると次々と出てきて、しかもいずれも相当なレベルに達していることが分かります。ところがそういう一面は研究室でのお姿からはほとんど想像できません。バイタリティーが人並みはずれていて、そしてアフター・ファイブ（実際はアフター・ナインかテンか）の切り換えがお上手なのだと思います。先生の鞆にはいつも推理小説やサスペンス小説が入っていて、出勤の電車では学术论文，帰宅の電車では小説を読まれるそうです。

以上のように、高橋先生は、研究に対しても趣味に対しても常に若々しく打ち込んでおられ、今

年でご定年ということがまったくわかには信じられないような思いがいたします。ご退官後は、東京薬科大学に昨年新設された生命科学部に移られ、蛋白質の構造・機能相関の研究を続けられるとのことで、昨今は新しい研究室のセットアップに意欲的に取り組んでおられます。これまでの生物化学教室の発展に対する先生のご尽力に改めて敬意を表するとともに、どうか新たな地でも優れた研究を継続され、また若々しい人生を楽しんで頂きたいと思います。後のことは人生の達人に対して申し上げる迄もないことではありましようが。

本稿のために多くの情報を提供して下さった高橋研究室井上英史助手に感謝いたします。

